

## 果樹カメムシいま・むかし

## 果樹カメムシの発生と防除を取り巻く状況の変化

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 み しろ こう じ  
植物防疫研究部門

## はじめに

果樹を加害するカメムシ類は、カンキツで22種、リンゴ8種、ナシ14種、モモ8種、カキ22種、ブドウ4種が記載されている（日本応用動物昆虫学会，2006）。このうち、発生量が多いチャバネアオカメムシ（以下ではチャバネ）、ツヤアオカメムシ（以下ではツヤアオ）、クサギカメムシ（以下ではクサギ）が果樹カメムシ類と称される（図-1）。近年は冬季の温度上昇の影響もあり、北東北でチャバネによるリンゴの被害が増加し、南方系のツヤアオの被害が東日本でも拡大している。2023年は夏以降にテレビ等でカメムシの大発生に関する報道が多数見られ、8月以降に果樹のカメムシ類に関する13件の注意報が発表された。多発と少発を繰り返すのが果樹カメムシ類の顕著な特徴であったが、本稿では近年認められるようになった発生上の変化に言及し、防除対策について考察してみたい。

## I 基本生態

前記の3種の果樹カメムシ類の生態は主要種であるチャバネを中心にまとめて解説されることが多い。成虫が落葉下などで越冬し、春の気温の上昇とともに餌を求めてサクラヤクワなど種々の植物間を移動し（守屋・志賀，

1982）、その過程で果樹園にも飛来してウメ、ビワ、モモやナシなどの幼果やカンキツの花を加害する。その後、スギ・ヒノキなどの球果が充実するとそれらが植生している林地に移動し、球果を餌に幼虫が発育する。夏季に新成虫が出現し、球果が豊富で気温が高い状態が続くと、その後1~2世代増殖を繰り返す。しかし、その過程で球果を消費し尽くすと、羽化した新成虫が餌を求めて林地を離脱して果樹園に飛来しカンキツやナシ、カキなどの果実を加害する。

果樹カメムシ類の生活環は種ごとに異なる。ツヤアオは越冬場所が常緑樹の葉裏やヒノキ等針葉樹の葉が重なり合った場所であること以外はほぼチャバネと同様の生態と果樹への被害を示す。一方、クサギは建物の隙間や樹皮下などで集団を形成して越冬し、また、針葉樹の球果以外でもウワミズザクラ（舟山，2007）やリンゴ果実（舟山，2005）等の様々な餌で幼虫が発育する。このことは、針葉樹の球果を主要な餌として幼虫が発育するチャバネやツヤアオとは発生パターンが異なることを示している（外山，2014）。

カメムシ類の果樹園への飛来は春と夏以降の大きく2回のピークが現れる可能性があるが、飛来時期や飛来量は年や地域により大きく異なるため、防除のタイミングを判断するのが難しい。



図-1 果樹カメムシの主要3種

a. チャバネアオカメムシ, b. ツヤアオカメムシ, c. クサギカメムシ.

Changes in the Occurrence and Control of Fruit-Sucking Stink Bugs. By Koji MISHIRO

(キーワード：果樹カメムシ，生態，発生予察，防除)